

現代ドイツ語の時制とアスペクト

—完了時制と過去時制における参照時と事象時をめぐって—*

藤 縄 康 弘

1. はじめに

現代ドイツ語において、過去分詞形の動詞に現在時制と同形態の助動詞 *haben* (英: *have*) または *sein* (英: *be*) を組み合わせて表現される完了時制 (Perfekt) は、共起する時の副詞規定や文脈次第で《現在完了》と《過去》という2様の解釈を許す。これに対し、助動詞を要さない過去時制 (Präteritum) は《過去》しか表さないとされる:

- (1) a. Ich *habe* gerade *geduscht*.
私はちょうどシャワーを浴びたところだ。 《現在完了》
b. Gestern *habe* ich um 8 Uhr *geduscht*.
昨日、私は8時にシャワーを浴び(てい)た。《過去》
- (2) a. Ich *duschte* gerade.
私はちょうどシャワーを浴びていた。 《過去》
b. Gestern *duschte* ich um 8 Uhr.
昨日、私は8時にシャワーを浴び(てい)た。《過去》

完了時制による表現(1)と過去時制による表現(2)とを比べると、(1a)と(2a)は、相的な関係「ちょうど」を意味する *gerade* のほかは副詞規定を伴っておらず、*jetzt* 「いま」や *gestern* 「昨日」といった特定の時は明示されていない。にもかかわらず、(1a)は「いま」、(2a)は「いま」より以前の時間についての発言であると理解される。これに対し(1b)と(2b)は、動詞の形態こそ異なれ、いずれも「昨日8時」に何が起こ(てい)たかを述べた文であり、事象時が発話時に先立つという関係が共通する。

この現状について、Reichenbach (1947) に多かれ少なかれ依拠した先行研究では、完了時制の2様の解釈は、過去時制とは別個のひとつの基本義に帰着するとの見方が優勢である。発話時 S、事象時 E に加えて参照時 R を設定するこ

* 本稿は、科学研究費補助金基盤研究(B)18H00664による研究成果の一部である。

とで、完了時制の基本義は「E<R,S」, 過去時制のそれは「E,R<S」であるとされる。こうした見方の中では、完了時制の《過去》読みが基本義「E<R,S」の直接的帰結なのか (Klein 1999, Thieroff 1994), それともそこから直示転位 (deiktische Verschiebung) 等の過程を経て得られる派生的産物なのか (Ballweg 1988, Ehrich und Vater 1989, Ehrich 1992 など) が主たる関心事となり、盛んに議論された反面、経験的分析に先立って採用された一連の道具立て一直示の原点としてのSのほか導入されたRとEの定義や両者の関係、さらには、ひとつの時制にひとつの基本義が対応するという範疇観など¹には、ごく一部の研究 (例えば Löbner 2002) を除いて、批判的検討の目は向けられて来なかった。

本稿は、現代ドイツ語の時制、とりわけ完了時制と過去時制を対象に、従来見過ごされてきたこの課題に取り組む。Reichenbach (1947) の記号論理的枠組みに認知論的発想を加味した新たな時制論の輪郭を提示することを目指す。

2. 注視点としての時 vs. 視座としての時—R・Eの図地反転

先行研究の共通認識として、Eに対するRの関係がアスペクトであるのに対し、時制はSに対するRの関係である。もっとも、Rを「Sより以前 (R<S)」や「Sと重なる (R,S)」などと定めたところで、時の指示範囲を大まかに指定したに過ぎない。実際の表現においてはこの範囲の中から「いま」や「昨日の夕食後」といった具体的な時が、副詞規定や文脈によって明示的・暗示的に指示される。こうしてRは、個別の文が解釈される際には、時点 (それ以上分解されない個体) ないし時間 (時点の集合ないし塊) として了解されるわけだが、このような個体でも量でもあり得るといふRの存在論的両義性は、先行研究において積極的に顧みられて来たとは言いがたい。また、これに連動して、Rが「注視点」 (= 指示される対象としての時) なのか、「視座」 (= 指示の起点としての時) なのかの区別も往々にして曖昧にされたままであった。

注視点と視座とは対概念である (成田 2009)。このため、Rにもう一種の時であるEを有機的に関連づけてアスペクトを定義すれば、新たな展開が望めるだろう。そこで一案として以下を提案する：Rが注視点のとき、この時点は視座たるEによって特徴づけられる—つまりRは文が記述する事象を正しいと認定し得る時間Eに属する瞬間のひとつである。他方、Rが視座のときは、この時

¹ 本稿で時の関係を記号で表記する場合、Reichenbach (1947) ではなく Ehrich (1992: 67) の様式に従う (X<Y: 「XがYより以前」、X,Y: 「XがYと (厳密に / 部分的に) 重なる」)。

間の中に E が、文の記述する事象が生起する時点として認定される。この定義では、E が視座なのか注視点なのかに応じ、R に注視点または視座の機能が相補的に付与される。時点としての E を時間 R の中に据える「R = 視座, E = 注視点」が外観的・全体的な完了相, 時間 E の一部として時点 R を認定する「R = 注視点, E = 視座」が内観的・局所的な不完了相に相当する。

こうして完了相・不完了相の相補性が R と E の図地反転の関係として捉え直される。図地反転とは、素材的に同一の表現において背景(地)をどこに定めるかによって前景に示される内容(図)が変異する現象である。有名な例は「ルビンの壺」だが、アスペクトの図地反転は、事象に内在する時間構造の有無や質(アクツィオーンスアルト)に負うところが大きい。事象が内的時間構造を有する出来事(活動, 変化)や一時的状態であれば、E が時間的に臨界点を持ち得ることから、R だけでなく E も注視点(=図)となり得る結果、完了相・不完了相のどちらも容認される。これに対し、内的時間構造を欠く恒常の状態では、臨界点が想定されないことから E は必ず時間として把握され、そこに R が時点として帰属するため、不完了相しか実現されない。²

このように注視点・視座という認知論的発想を採用して定義し直した R と E の関係性は、事例分析に恣意的に適用される余地が小さく、反証可能性を担保していると考えられる。さらに図地反転は、アスペクトを形態論的に区別しないドイツ語において各時制に見られるアスペクトの曖昧さをある程度解決する原理としても有望である。そこで次節以降はこれらを道具立てにドイツ語の代表的時制—現在・完了・過去—を素描的ながらも具体的に記述し、この記述が妥当性・首尾一貫性の点で従来説に優ることを示す。

3. 現在時制

紙幅の都合で普遍的真理 (*Das Natrium ist ein Metall* 「ナトリウムは金属だ」) や歴史的現在 (*Im Jahr 800 wird Karl der Große gekrönt* 「800年、カール大帝が戴冠される」) の表現を除くと、現在時制は過去時制との対比から、S より以前 (R <

² 「x は金髪だ」のような恒常の状態は現に注視点(=直接知覚の対象)たり得ない:

(i) *Heidi sah Luise blond (sein). [Maienborn (2003: 67)]

(ii) ハイディはルイーゼが金髪なのを目にした。

当該の状態をドイツ語の知覚動詞 sah (<sehen 「見える」) の下に埋め込んだ (i) はそもそも非文であるし、非文でない日本語の対訳文 (ii) でも、「ルイーゼが金髪なの」は恒常の状態(事象)の表現ではなく、「金髪のルイーゼ」と等価の個体の表現である。

S)の時間をRの潜在的範囲から除外すると考えられる。本節では、この条件に適合する時点と時間の副詞規定として代表的である *jetzt* 「いま」と *heute* 「今日」がRを明示する事例を論じる：

- (3) a. Karl *schläft* jetzt auf dem Sofa. カールはいまソファで寝(てい)る
 b. Karl *schläft* heute auf dem Sofa. カールは今日ソファで寝る
 (4) a. Karl *erreicht* jetzt das Ziel. カールはいまゴールに到達する
 b. Karl *erreicht* heute das Ziel. カールは今日ゴールに到達する
 (5) a. Karl *ist* jetzt (??um 6 Uhr) *jung*. カールはいま(6時に)若い
 b. ??Karl *ist* heute *jung*. カールは今日若い

(3)の2つの例では、述語動詞 *schläft* (<*schlafen* 「寝ている」)が内的時間構造を有した非有界的(atelic)な事象を意味する。このうち *jetzt* と共起した(3a)はアスペクト的に曖昧であり、「いま寝ている」とも「いま(これから)寝る」とも解釈できる。前者の解釈は、*jetzt* がSと厳密に重なる注視点Rを指し、この時点が「寝ている」という継続的生起の時間Eに含まれることで得られる不完了相である。他方、後者の解釈ではもうひとつのR指示一視座としてのR指示一がなされる。この場合、時間としてのRの発端が*jetzt*を通じてSに同定される結果、「いま」に後続する時間の中に*schlafen*という出来事が生起する一すなわち、その時を境に「寝ている」が成立するような臨界点としてのEが近未来に存在する一という完了相が得られる。このように両義的な(3a)に対して(3b)は、*heute*がRを明示する限り、³「今日(これから)寝る」という完了相しか意味しない。というのも、概念的に幅のある時間を意味する*heute*は、時点であるSと厳密には重なり得ず、Sに後続する時間の限度を区切るよりほかないからである。こうしてもっぱら、S以後のまだ「今日」である時間を視座Rとし、その中に、その時をもって*schlafen*が生起したことになる臨界点Eを位置づける完了相が実現されるのである。

(4)の述語動詞 *erreicht* (<*erreichen* 「到達する」)が意味する事象も、(3)同様、内的時間構造を有するが、(3)とは異なつて有界的(telic)である。有界的な事象では、非有界的な事象のように臨界点と同質的生起がその後も継続することはない。臨界点に至るや否や終結してしまうこうした事象ではEが常に時点である。そのようなEがSと厳密に重なる注視点Rを特徴づけることは、実

³ *heute*はRの表示のほか、対比や枠づけの副詞規定でもあり得る。注4および5.節を参照。

況中継や明示的遂行表現 (explicit performative) といった語用論的に特殊な環境を除いて望めない (Löbner 2002: 257)。このため、有界的事象の現在時制による表現は、jetzt と共起しても heute と共起しても、R を原則、視座たる時間として指示する結果、近未来を意味する完了相に帰着するのである。

最後に (5) は、形容詞 jung 「若い」とコピュラ ist (<sein) からなる恒常的状态の表現だが、この事象は (3)–(4) のいずれとも異なり、内的時間構造を持たない。ここには臨界点の存在を一非有界的な一時的状態 schlafen に見られたような「その時をもって事象が生じたことになる」という意味でも、有界的な変化 erreichen が備えていたような「自然な終結」という意味でも一認め難い。こうした内的時間構造の欠如は、「若い」という事象を一種の個体と見なして時間の中に位置づける完了相を妨げる。現に、heute が視座としての時間 R を指示する (5b) は異様である。⁴ これに対し (5a) は適格だが、それは jetzt が R を S と同一の時点とし、これが「カールが若い」の妥当する時間 E を構成する時点のひとつである、という不完了相と整合するからである。ここでは、注視点としての R が視座としての E によって特徴づけられており、その意味で (5a) の解釈は (3a) の不完了相解釈と同じである。ただし、(5a) の jetzt は「S と同一の時点」を内包的に提示するのみで、具体的な一時点 (たとえば「6時」) に限定し難い。というも、恒常的状态は、それが妥当する時間 E に帰属する時点 R が当該の現在時制文によってなし得るどの発話の S と関連づけられても、原則真の命題をなすものだからである。あわせてここでは、(3a) の事象が世界に生起する実体としての状況 (Davidson 1967) であるのに対し、(5a) の事象は世界についての理念 (命題) である、という相違も押さえたい。

4. 《現在完了》読みの完了時制

《現在完了》を意味する完了時制では、R は S と一致し、この時点が注視点として機能する。その限りで、不完了相解釈の (3a) や (5a) と変わらないが、述

⁴ (5b) が容認されるとすれば、「ふだん若く (見え) ないのに今日は…」という対比で解釈される。この場合、jung が文字どおりに「若い」という恒常的性質を意味しているのかどうか疑われる上、仮に文字どおりの意味だとしても、恒常的性質が「今日」一時的に妥当しないとするのは詭弁でしかない。(5b) はあくまで「カールは (いま) 若い」という発言をなす。と同時に、この発言が「今日」に限ってなされるものだ、とも論評している。こうして発言行為の背景に関わる「今日」は、発言内容を構成する R の表現ではないのである。

語動詞の意味する事象の E が R を特徴づけていた現在時制と異なり、《現在完了》読みの完了時制で R を特徴づけるのは E に後続する結果事象の時間 E' である (Klein 1999: 74ff.)。

この結果事象は、動詞の屈折形態論 (過去分詞 + hab-/sci-) によって導入されるもので、当該動詞から派生した形容詞的な過去分詞が意味する結果状態と等価ではない:

- (6) a. Ich *habe* das Fenster schon *geöffnet*. 私は窓をもう開けた。
 b. Ich *habe* gerade *geduscht*. [= (1a)]

(6a) では、有界的事象を意味する動詞 öffnen 「開ける」が完了時制の述語 habe ... geöffnet を形成しているが、ここで「いま」妥当する結果事象は、必ずしも動詞の語彙的意味に内在する「窓が開いている」であるとは限らない。例えば、換気のために窓を開けよとの求めに私が (6) で応じたとすれば、私の発言意図は、この求めを断る目的で「換気はもう済んでおり、あらためて窓を開ける必要はない」である。この場合、「いま」妥当する結果事象は「換気は済んでいる」であり、窓自体はこの間ふたび閉められ、もはや開いていなくても一向に構わない。さらに《現在完了》読みの完了時制は、(6b) の habe ... geduscht (< duschen 「シャワーを浴びる」) のように語彙意味論的に結果状態を含意しない動詞からも問題なく形成される。(6b) では文脈に応じて「まだ髪が濡れている」「さっぱりしている」「出かける用意ができている」などが「いま」妥当する結果事象として理解される。

こうして幅広い種別 (アクツイオーンズアルト) の動詞で可能な《現在完了》読みの完了時制は、S に対する R の関係という時制の面では、現在時制の守備範囲に完全に収まる。現在時制との相違は事象時の扱い—語彙意味論どおりの事象の E か、屈折が導入する結果事象の E' か—に過ぎない。《現在完了》は第一に「E', R, S」である。次いで「E < E'」により「E < R, S」でもある。いずれにせよ一貫して「R, S」が成り立つ。よって、この用法の完了時制は多くの先行研究の考えどおり現在系列の時制に位置づけられる。

ただし、E と E' の複合に伴い《現在完了》は「局面の転換」を潜在的に意図する。この副産物のため、ドイツ語では英語に見られる完了時制の《継続》用法が困難である:

- (7) a. I *have been working* {since 7 o'clock / for five hours}.
 b. I *have lived* in London {since 2013 / for ten years}.

- (8) a. *Ich arbeite* {seit 7 Uhr / seit fünf Stunden}.
私は {7時から / 5時間前から} 働いている
- b. *Ich wohne* {seit 2013 / seit zehn Jahren} in London.
私は {2013年から / 10年前から} ロンドンに住んでいる
- (9) a. *Ich habe* {seit 7 Uhr / seit fünf Stunden} *gearbeitet*.
私は {7時から / 5時間前から} 働いてきた
- b. *Ich habe* {seit 2013 / seit zehn Jahren} in London *gewohnt*.
私は {2013年から / 10年前から} ロンドンに住んできた

英語では(7)のように、非有界的事象を意味する動詞に現在完了時制を適用して《継続》の解釈を得ることができる。この場合、「いま」妥当する結果事象は「働いている」や「ロンドンに住んでいる」だが、これの事象時E'は動詞の意味する事象が発生した「7時」・「5時間前」ないし「2013年」・「10年前」の臨界点Eに継ぎ目なく接続し、「いま」だけでなくこれまでも、またこれからも続いて行くと見込まれる時間である。こうした時間の《継続》は、ドイツ語では完了時制ではなく、(8)のように現在時制で表される。というのも、《継続》はもともと非有界的な動詞の内的時間構造に潜在している。この時間構造からさまざまな局面を顕在化するにあたり、英語のように進行形・未来形・完了形を使い分けなくても、副詞規定や文脈の助けを借りれば単純な現在時制でこと足りるドイツ語にあっては、迂言的な「過去分詞+hab-/sei-」で現在系列の時制を表現するのは有標のオプションである。わざわざこのように表現するからには相応の動機が必要となる。そこで(9)の完了時制は、語彙意味論的に期待される《継続》を一旦留保し、「事象がすでに臨界点に達した結果、『いま』はその継続が問われる局面である」との原因・結果関係を提示するのである。

それでも、(10)のような非対格動詞の事例をもとに、ドイツ語にも *seit* 句「...以来、...前から」と共起する《継続》用法の完了時制はある、と考える向きがあるかもしれない(Litvinov und Nedjalkov 1988, 池内 2015):

- (10) a. *Der Autor ist* [...] *seit 2008 an ALS erkrankt*. [実例; 池内 (2015: 147)]
著者は [...] 2008 年以來 ALS に罹っている
- b. *Das Bein ist* *seit zwei Tagen geschwollen*. [Gese et al. (2011: 103)]
脚が 2 日前から腫れている

非対格動詞の完了時制は助動詞として *haben* (英: have) でなく *sein* (英: be) を選択するので、確かに(10)は完了時制の表現のように見えなくもない。しか

し、結果状態を意味する sein + 過去分詞は (11a) のように他動詞からも形成可能であり、この表現 (いわゆる「状態受動」) は当該動詞の一能動態 (11b) であれ、受動態 (11c) であれ一完了時制とは形態論的にも意味論的にも明確に一線を画す:

- (11) a. Das Fenster *ist* {*vor einer Stunde / seit einer Stunde} *geöffnet*.
窓は {1 時間前に / 1 時間前から} 開いている
- b. Ich *habe* {vor einer Stunde / *seit einer Stunde} das Fenster *geöffnet*.
私は {1 時間前に / 1 時間前から} 窓を開けた
- c. Das Fenster *ist* {vor einer Stunde / *seit einer Stunde} *geöffnet worden*.
窓は {1 時間前に / 1 時間前から} 開けられた

しかも、過去分詞が (12) のように「消失・消滅」を含意するものであると、非対格動詞・他動詞を問わず、seit 句との共起は極めて難しくなるという共通性も認められる:

- (12) a. ^{??}Der Ballon *ist* seit zwei Minuten *geplatzt*. [Gese et al. (2011: 103)]
風船は 2 分前から破裂している
- b. ^{??}Die Handschrift *ist* seit dem Druck *vernichtet*.
手稿は印刷の時以来、処分されている。

もし seit 句と共起する sein + 非対格動詞の過去分詞が完了時制表現として、「いま」以前に妥当した事象の結果状態を意味するのなら、(10) でも (12a) でも、含意される結果状態は等しく特定可能なのに、どうして一方は容認され、他方は容認され難いのか、説明が見つからない。(10) や (12a) は、完了時制の表現とたまたま外形が同じだけの同音異義表現なのであり、これは (11a) や (12b) と同列の結果表現と見なすのが適当であろう。つまり件の表現は、動詞としての過去分詞 + 助動詞 sein ではなく、形容詞としての過去分詞 + 助動詞化していない sein の表現 (Gese et al. 2011) であり、時制的には非対格動詞の完了時制ではなく、本動詞 sein⁵ の現在時制表現なのである。

⁵ この sein は、形容詞 (や名詞の) 述語に定形を付与するコピュラというよりも「存在動詞 (Verbum substantivum)」(Kotin 2015) の性格が強い。これが原因で、過去分詞の意味する性質と現在時制の sein が意味する「現前」とが整合的である (10) や (11a) —「著者は病気の状態で/足は腫れた状態で/窓は開けられた状態で現前する」— は問題ない一方、「消失・消滅」と「現前」が相容れない (12) は一相応の語用論的支えがない限り (Gese et al. 2011) —容認され難いという対照に至ると考えられる。

本節をまとめると、ドイツ語に《現在完了》としての完了時制は確かに存在する。ただし、その基盤にあるのは、動詞が本来的に含意する E ではなく、完了形態「過去分詞 + hab-/sei-」によって超語彙意味論的に導入される結果事象の時間 E' が注視点たる R 「いま」を特徴づける (E', R, S) という関係である。この場合、原因・結果関係が「 $E < E'$ 」ゆえ、動詞本来の E が S より以前に位置すること ($E < R, S$) もおのずと導かれる。しかし、まさにこの原因・結果関係ゆえに、ドイツ語の完了時制は《継続》を意味し難い。動詞の種別の点でそもそも継続相が基本であるドイツ語には、S より以前の時間を S に連なる「拡張的『いま』 (Extended Now)」(Stechow 1999) と見なししてまで、完了時制を現在系列に組み込む体系的必然性がないからである。

5. 《過去》読みの完了時制

前節最後の指摘は、《過去》読みの完了時制が現在系列の時制でないことを示唆する。果たしてこの見立てが正しいのかどうかは、S より以前の時を指す副詞規定 (gestern 「昨日」など) のこの時制における振舞いを観察することで確かめられるだろう。

具体的な検討に入る前に、ドイツ語の場合、gestern などの副詞規定は必ずしも「 $R < S$ 」の直接的反映とは限らないという Löbner (2002) の指摘を押さえておきたい:

- (13) Jetzt, wo Karla gestern hier *eingezogen ist*, brauchen wir einen neuen Schlüssel fürs Klo. [Löbner (2002: 266)]

カルラが昨日ここに入居したいま、トイレに新しい鍵が要る

(13) では関係文中の完了時制 *eingezogen ist* (<einziehen 「越して来る、入居する」) が gestern と共起している一方、当該の関係文は現在時制による主文で R を明示する副詞規定 jetzt 「いま」と同格の表現である。この完了時制は「カルラが入居した」という事象の結果が「いま」妥当することを暗示する《現在完了》の事例と言えるが、ドイツ語の場合、この用法でも S より以前の時間を直示する副詞規定 gestern が共起可能である。ドイツ語の完了時制では、屈折形態論が導入する E' と並んで、本動詞そのものの E もなお有効である。gestern はこの E に関連していれば第二の参照時として機能することが可能である。このように 2 つの R を導入し得る点に「複合時制」としての完了時制の本質を見出す研究者は少なくない (Ballweg 1988, Klein 1999 など)。

とはいえ、《現在完了》読みの完了時制に *gestern* 等の副詞規定が可能だからといって、即、この時制による S より以前の時間指示が一様に《現在完了》の第二の R に還元されることにはならない。本稿のアスペクト論に照らして予想されるのは (14) である：

- (14) 概念的に幅のある時間を意味する副詞規定 (例えば *gestern*) が完了時制において第二の R を明示するならば、この完了時制は視座たる R の中に動詞の本来的事象の E を臨界点として位置づける完了相で解釈される。

実際、(13) はこの予想のとおり、第二の R 「昨日」の中に「入居」の臨界点 E が位置づけられた完了相をなしている。

さらに、(14) の対偶として (15) も予想されるが、これも (16) によって裏づけられる：

- (15) 完了時制が注視点としての R を動詞本来の事象時 E によって特徴づける不完了相で解釈されるならば、概念的に幅のある時間を意味する副詞規定 (例えば *gestern*) が第二の R を明示することはない。
- (16) a. *Jetzt, wo Karla letzte Nacht um 3 Uhr noch *geweint hat*, bin ich müde.
カルラがゆうべ3時になってもまだ泣いていたいま、私は眠い
- b. *Jetzt, wo Karla gestern die ganze Nacht *geweint hat*, bin ich müde.
カルラが昨日一晩じゅう泣いていたいま、私は眠い
- (17) a. Letzte Nacht *hat* Karla um 3 Uhr noch *geweint*. Jetzt bin ich also müde.
ゆうべカルラは3時になってもまだ泣いていた。だから、いま私は眠い
- b. Da Karla gestern die ganze Nacht *geweint hat*, bin ich jetzt müde.
カルラが昨日一晩じゅう泣いていたものだから、いま私は眠い

(16) では、関係文に完了時制 *geweint hat* (<weinen 「泣く」) が現れているが、これに a では noch 「まだ」、b では die ganze Nacht 「一晩じゅう」が付加されている。これらの副詞規定は、Nacht 「夜」に相当する時間の中に2つ (以上) の時点 $t_0 \dots t_n$ ($t_0 < t_n$) を設定し、 t_0 における事象の妥当性がそれより後時の (いずれの) t_n においても失われていないこと—すなわち、 t_0 から t_n への時間の推移が終結を伴わないものであること—を明確にしている (Löbner 2002: 270f.)。こうして (16) の関係文は不完了相の解釈を余儀なくされるわけだが、この環境に letzte Nacht 「ゆうべ」や gestern 「昨日」のような S より以前の時間を明示する副詞規定はまったく整合しないのである。

興味深いことに、(16) で不適格だったこれらの副詞規定は、関係文の内容を

独立的な主文や理由を表す副文によって表現した (17) では完全に適格となる。いま見たとおり、(16) の不適格性は、一方で *jetzt, wo ...* 「...のいま」が *geweint hat* を明示的に《現在完了》読みとし、この事象の臨界点たる E を第二の R の中に位置づけることを求めているのに、付加された *noch* や *die ganze Nacht* が当の臨界点の到来を否認する、という矛盾のせいであったが、同じ矛盾が当てはまらない (17) のほうは、(16) と同様に《現在完了》読みを前提とする限り、その適格性に説明がつかないことになる。

そこで、(16) の不適格性に鑑みてより経験的に妥当と考えられる (15) の線に立つならば、(17) の *letzte Nacht* や *gestern* は E が位置づけられる時間 R の表示ではなく「枠づけの修飾語 (*rahmensetzender Modifikator*)」(Maienborn 2003: 76ff.) として述語の適用範囲を限定するものと分析される。すなわち (17a) の前半部は、「ゆうべ」のカルラについて「3 時の時点でも泣き止むに至らなかった」ことを、(17b) の副文は「昨日」のカルラについて「一晩のどの時点でも泣き止むに至らなかった」ことを、それぞれ述べ立てているのである。この場合、完了時制は S より以前の時点—具体的には「ゆうべの 3 時」や「昨日の夜の全時点」—を第一かつ唯一の R として指示していることになる。このように完了時制は、アスペクトの条件次第で《現在完了》($E < R, S$) のみならず、これには還元されない《過去》($E, R < S$) の関係も意味するのである。

完了時制の《過去》が《現在完了》から導き難いことは、内的時間構造を持たない事象の表現からも窺える：

- (18) a. [?]*Vorher bin ich jung gewesen.* 前もって私は若かった
 b. {*In den 90er Jahren/Damals*} *bin ich jung gewesen.*
 {90 年代 / 当時} 私は若かった

(18) では *jung* 「若い」に完了時制のコピュラ *bin ... gewesen* ($< \text{sein}$) が補われて恒常の状態が表現されている。この表現が (18a) で容認されないのは、相対的な時間の副詞規定 *vorher* 「前もって」が第一の R として S を基準にとり、S より以前の時間を第二の R として導入することで《現在完了》読みを求めているのに、内的時間構造の欠如から臨界点を想定できない恒常の状態の E は視座 R の中に時点として位置づけることができない、という矛盾による。他方、(18b) の副詞規定 *in den 90er Jahren* 「90 年代」・*damals* 「当時」も S より以前の時間の表現だが、こちらの完了時制は一転して容認される。*vorher* と違い、これらの副詞規定は、S より以前の時間を絶対的に指示することから、《現在完了》読みを強制しない上、内的時間構造の欠如が R を注視点とする不完了相解釈を要求

する。こうした条件の下、当該の副詞規定は(15)により、R指示ではなく枠づけの副詞規定として機能することになる。その結果、「90年代」や「当時」の中から任意に取り出された時点Rに関する《過去》読みの完了時制が成立するのである。

本節の結論として、完了時制の多義は、《現在完了》から《過去》が派生するというかたちでは捉え切れない。2つの読みは共時的にもはや別個のものとして存在すると認めざるを得ない。これは先行研究でも少数派ながらすでにLöbner (2002)等によって示されていた見解だが、本節の考察はそれをあらためて支持する結果となった。さらに独自の成果として、この多義性が、本稿冒頭で定義したような図地反転の原理に根差したアスペクト対立によって差異化(dis-ambiguous)されることも確認した。

6. 完了時制 vs. 過去時制

前節の結果を受けて本節では、完了時制と過去時制とがSより以前の時の表現としてどう異なるのかを確認したい。

完了時制は、明示的または暗示的に「Sより以前」が指示される文脈では、一部が《現在完了》(=Sより以前の時間を第二のRとする)、一部が《過去》(=Sより以前の時点を第一かつ唯一のRとする)を表現し、前者はアスペクト的に完了相、後者は不完了相に当たるわけだが、後者の意味する《過去》は一すでに冒頭(2b)で示したように一過去時制でも表現し得る。完了時制による表現が実際のところどちらに該当するのかは、jetzt(第一のRを指示する)やnoch(Rを時点として条件づける)といった副詞規定に負うところが大きく、こうした語彙的表示が欠けると、表現の区別・選択はもっぱら文脈(談話や発話状況)に委ねられる。

一般的な文脈では、話し手と聞き手は発話状況を共有していると考えられる。こうした環境では、すでに双方にとって自明であるSについて、もしあらためて厳密にRとの関係性を示さなければいけない—しかも、単に文の形式的要請から必須となっているに過ぎない文法範疇である時制を通じて—としたら相当な負担であろう。この点で、完了時制は好都合である。「 $E < S$ 」を意図する限り、SとRの関係を曖昧にしておけるからである。他方、過去時制は「 $R < S$ 」を一義的に表現し、この関係を積極的に表示しない完了時制に対する有標の範疇と見なされる。こうして、無標の完了時制が日常的に広く用いられる一方、過去時制はSの同一性が自明でない—例えば、昔話や自伝的回想といった一特

殊な発話状況に相応しい、という文体上の相違が説明される。

ただし、一部の動詞は完了時制より過去時制で現れるのがむしろ普通である：

- (19) a. ²⁹Vorher war ich jung. 前もって私は若かった
 b. {In den 90er Jahren / Damals} war ich jung. {90年代 / 当時} 私は若かった
- (20) a. Ich war jetzt gerade bei Frau Weber.
 私はいまちょうどウェーバーさんのところに行って来たところだ
 b. Damals war ich bei Frau Weber. 当時、私はウェーバーさんのところにいた

(19)は、(18)で完了時制だったコピーラの *sein* を過去時制に置き換えて表現したものである。すでに(18)からして、恒常的状态表現ゆえ、《過去》読みしか認められなかったが、まったく同じことがここにも当てはまる。さらに(20)のように、*sein* が「所在」(一時的状態)を意味するや、(20b)のような《過去》読みに加え、(20a)のような《現在完了》読みも可能となる。damals「当時」が枠づけの副詞規定として機能する(20b)では、Sより以前の時間の中にRが注視点として設定され、この時点が、文の記述する事象「私はウェーバーさんのところにいる」が妥当した時間Eの一部であると特徴づけられる。これに対し(20a)では、jetzt gerade「いまちょうど」が厳密に発話の時点Sを指示する中、そのSにおいて現に妥当な事実である「私はここにいる」と相容れない命題「私はウェーバーさんのところにいる」が過去時制を介して提示されている。その結果、過去時制によって潜在的に指示される「Sより以前」のRが、Sと質的に正反対のものとしてSと対比される。この対比から「私はここにいるいまこの瞬間以前は別の場所にいた」との会話的含意が生じ、(20a)は《現在完了》の代替表現として機能するのである。

語彙的意味が希薄な *sein* の過去時制が《過去》読みだけでなく、《現在完了》読みの完了時制とも交替し得るという事実は、問題の核心が事象概念の如何にあるのではないことを示唆する。決定的なのは、事象の指示のされ方である。*sein* は恒常的・一時的いずれの状態表現であれ、Davidson (1967) の言う実体としての状況の項を経ずに状態を指示する (Maienborn 2003: 64ff.)。状況指示がこうして語用論に委ねられるからこそ、*sein* の下では、状況項を有する他の大多数の動詞よりもはるかに自由に事象の外延が変動し得る。この自由さがアスペクト(RとEの包含関係)を柔軟に決定し、過去時制を本来的な《過去》読みばかりでなく《現在完了》読みでも可能にしていると考えられる。

その証拠に、《現在完了》読みの過去時制は *sein* のみならず、haben「持っている」や *wissen*「知っている」などの状態動詞、さらには受動や話法の助動詞

にも認められる現象である (Fuchs 1988: 9; 嶋崎 2002: 44f.):

- (21) a. Ich habe keine Zeit. Ich *hatte* gerade Unterricht. In Kürze treffe ich mich mit Eva.
 時間がないんだ。いままで授業があつて、このあとはエファに会うものだから。
- b. Wirklich? Das *wusste* ich nicht. 本当? それは知らなかった
- c. Der Ball ist im Spiel, sobald der Stoß ausgeführt *wurde*. [実例; Latzel (1977: 89)]
 ボールはキックされたら即インプレーとなる
- d. Verzeih mir bitte die Verspätung, aber ich *musste* eine Aufgabe erledigen.
 遅れて申し訳ない。課題を片づけなければいけなかったものだから

(21a–b) の *hatte* (<haben) や *wusste* (<wissen) は文脈に応じて、恒常の状態だけでなく一時的状態も意味すると言えなくもないが、(21c–d) の助動詞は自立的な事象概念をなすとは言い難い。これらの(助)動詞に共通する性質は、Davidson (1967) 的な状況項を欠いていることである。⁶ なお、受動態による (21c) では、本動詞 *ausführen* 「行う」が状況項を含んでいる。それゆえ、(21c) の内容を一助動詞 *werden* を用いずに一能動態で表現すると、もはや過去時制 (22a) は容認されず、完了時制 (22b) のみが適格な表現となる:

- (22) a. *Der Ball ist im Spiel, sobald man den Stoß *ausführte*.
 b. Der Ball ist im Spiel, sobald man den Stoß *ausgeführt hat*.
 ボールはだれかがキックしたら即インプレーとなる

この対照からも、状況項の欠如が過去時制の《現在完了》読みにとって決定的であると言える。

ここまでは完了時制と過去時制の相互代替可能性を見てきたが、最後に、完了時制に置き換わり難い過去時制の表現をいくつか指摘する:

- (23) a. Das Haus *drohte* zusammenzustürzen. 建物は崩壊しそうだった
 b. *Das Haus *hat* zusammenzustürzen *gedroht*.
- (24) Sie *bekamen* die Suppe. お客様がスープを召し上がるのでしたね
- (25) Morgen Abend *ging* erst das Schiff, es war nicht mehr so weit, ich *dachte*, das schaffst du ganz gemütlich. [実例; Fuchs (1988: 7f.)]

⁶ 状況項欠如の代表的兆候は、知覚動詞の非定形補文にならないことである (Maienborn 2003: 64ff.)。注 2 も参照。

明日の晩になってようやく船が出るようになっていた。船まではもうさほど遠くなく、ゆっくりしても間に合うぞと思った。

(23) では本動詞として「脅す」を意味する *drohen* が半ば助動詞化し、「...の恐れがある」という望ましくない見込みを述べるのに用いられている。この表現は (23a) のように過去時制では問題ない一方、(23b) のように完了時制では不適格である。過去時制 *drohte* が R を S より以前に設定しつつ、そこからなお S 方向に開かれた時間の中に可能な「崩壊」の時点を見出す前向き¹の視線も許容する一方、《過去》読みの完了時制 *hat ... gedroht* は R を常に時点とし、これを S より以前の「崩壊」の時間 E の最中に位置づける後ろ向き²の視線しか体現しないため、「見込み」の表現に相応しくないのである。

(24) はドイツ語学者の隠語で「ウェイトレスの過去時制 (*Kellnerin-Präteritum*)」と称される事例である。この文は別の文脈では「あなたがスープを受け取った」を意味するが、ここでは S より以前になされた注文を再確認する意図で用いられている。この表現は完了時制の《現在完了》と合わせ鏡のようである。《現在完了》読みの完了時制では、S より以前の時間の中に位置づけられた事象が、S の時点で成り立つ結果を暗示する、という関係が示されたが、(24) の過去時制は、S の場で現に成り立っている事象「あなた(客)がいまスープを受け取る」がすでに S より以前の時点 (= 注文の時点) において、まさにこの「いま」を先取りする格好で示されていた、と遡及的に認定する表現である。過去時制のこの用法は、動詞の選択を含めてもはや慣用化したものだが、ここにも (23a) と同じく過去から S のほうを見るという前向き³の視線が作用している。

さらにこの前向き³の視線は、慣用的でない (25) にまで当てはまる。この実例で特筆すべきは *morgen Abend* 「明日の晩」である。過去時制が一体験話法 (自由間接話法) でもないのに—S より以後の時間指示と共存している。こうした過去時制の振舞いもまた、完了時制のそれと鏡像的である。完了時制が本来の時制関係「R, S」を保ったまま S より以前の時間を第二の R として明示する副詞規定を許容したように、過去時制も「R < S」に加えて S より以後の時間を指示する同様の副詞規定をときに許容するのである。

7. むすび

本稿はドイツ語の時制について、完了時制と過去時制を中心に論じた。ポイントとして、完了時制に認められる《現在完了》と《過去》という2つの読みは「E < R, S」というひとつの基本義では捉え切れず、後者には過去時制と共通の

「E, R<S」が適当であること、ただし、完了時制の《過去》と過去時制の《過去》は視線の向きが対照的であること、これにより両時制は鏡像的に機能し得ることを主張した。全体として、完了時制と過去時制は従来考えられていた以上に類似性が高く、相違は時制よりもアスペクトのほうにあると言える。成田 (2009) に基づき、注視点としてのRと視座としてのRを原理的に区別して観察したことが、この成果をもたらしたと言える。

参考文献

- Ballweg, Joachim. (1988) Präsensperfekt vs. Präteritum im Deutschen. In: Ehrich, Veronika, und Heinz Vater. [Hgg.], 81–95.
- Davidson, Donald. (1967) The Logical Form of Action Sentences. In: Resher, Nicholas. [ed.] *The Logic of Decision and Action*, Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 81–95.
- Ehrich, Veronika. (1992) *Hier und Jetzt. Studien zur lokalen und temporalen Deixis im Deutschen*. Tübingen: Niemeyer.
- Ehrich, Veronika, und Heinz Vater. (1989) Das Perfekt im Dänischen und Deutschen. In: Abraham, Werner, und Theo Janssen. [Hgg.] *Tempus – Aspekt – Modus. Die lexikalischen und grammatischen Formen in den germanischen Sprachen*, Tübingen: Niemeyer, 103–132.
- Ehrich, Veronika, und Heinz Vater. [Hgg.] *Temporalsemantik. Beiträge zur Linguistik der Zeitreferenz*. Tübingen: Niemeyer.
- Fuchs, Anna. (1988) Dimension der Deixis im System der deutschen Tempora. In: Ehrich, Veronika, und Heinz Vater. [Hgg.], 1–25.
- Gese, Helga, Claudia Maienborn, and Britta Stolterfoht. (2011) Adjectival Conversion of Unaccusatives in German. In: *Journal of Germanic Linguistics*, 23/2, 101–140.
- 池内宣夫 (2015) 「〈sein + 自動詞の過去分詞〉における完了形と結果状態」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』37/2, 145–160.
- Klein, Wolfgang. (1999) Wie sich das deutsche Perfekt zusammensetzt. In: *Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik* 113, 52–85.
- Kotin, Michail L. (2015) Verbum substantivum aus synchroner, diachroner und typologischer Sicht. In: Kotin, Michail L. [ed.] *To be or not to be? The Verbum Substantivum from Synchronic, Diachronic and Typological Perspectives*, Cambridge: Scholars, 18–66.
- Latzel, Sigbert. (1977) *Die deutschen Tempora Perfekt und Präteritum: eine Darstellung mit Bezug auf Erfordernisse des Faches „Deutsch als Fremdsprache“*. München: Hueber.
- Litvinov, Viktor P., und Vladimir P. Nedjalkov. (1988) *Resultativkonstruktionen im Deutschen*. Tübingen: Narr.
- Löbner, Sebastian. (2002) Is the German Perfekt a perfect Perfect? In: *Sinn und Bedeutung* 4, 255–273.
- Maienborn, Claudia. (2003) *Die logische Form von Kopula-Sätzen*. Berlin: Akademie.
- 成田節 (2009) 「視点と日独語の表現—翻訳の対照を手がかりに」『東京外国語大学論集』

79, 399–414.

Reichenbach, Hans. (1947) *Elements of Symbolic Logic*. Berkeley: University of California Press.

嶋崎啓 (2002) 「時制」 井口靖 [編] 『新しいドイツ語文法構築への試み—命題の成立条件とその周辺』 (= 日本独文学会研究叢書 011), 32–46.

Stechow, Arnim von (1999) Eine erweiterte Extended Now-Theorie für Perfekt und Futur. In: *Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik* 113, 86–118.

Thieroff, Rolf. (1994) Perfect and pluperfect in German. In: Vet, Co, and Carl Vetters. [eds.] *Tense and Aspect in Discourse*, Berlin; New York: de Gruyter, 99–113.